



令和6年度の計画訪問が終了しました

今年度の指導訪問は市内12校で実施し、11月末をもってすべて終了しました。各学校の子どもたちの学校生活や授業の様子を参観させていただき、学校の抱える様々な課題を解決するための具体的な取り組みに触れることができました。

- ① 各校ともに、自校の強みと弱みを把握し、課題解決に向けて実態に応じた取り組みが行われていました。教職員一人一人が自校の様子を多面的にみて、取り組みを見直すことも大切にしてください。
- ② いじめ、不登校の児童生徒に対して管理職を含めて、教職員が共通理解を図って指導にあたっていました。今後も、初期対応に誠意をもってあたり、適切に記録を蓄積していくことを継続してください。
- ③ 主体的・対話的で深い学びを実現する教科等の授業に取り組み、授業研究を通して先生方一人一人が授業改善と資質向上に努めていました。各自が自分自身の課題解決に向けて今後も真摯に取り組みを進めてください。

授業を参観させていただくことを通して、子どもたちの姿からたくさんを感じ取り学ばせていただきました。分科会で先生方とともに同じ目線で授業での子どもたちの姿を振り返り、誰一人取り残さない授業について考えることがとても有意義な時間でした。



適応指導教室「すこやか教室」の在り方について

文部科学省の発表によると、令和5年度の不登校児童生徒数が34万人を超え、また福島県の不登校児童生徒数も4,000人を超えました。コロナ禍もあって毎年のように不登校児童生徒数が増え続けています。今、そのような子ども達の社会とのつながり、学びの保障、居場所づくりが大きな課題になっています。

須賀川市には適応指導教室「すこやか教室」が平成8年に設置され、多くの児童生徒が通級しています。すこやか教室の方針は次の通りです。

- 1 同学年集団や異年齢集団との小集団活動を通して、人と関わり合いながら行動できるようにします。
- 2 落ち着いた雰囲気の中で生活し、気持ちの安定を図ることができるようになります。
- 3 個別学習の時間を通して、基礎学力の補充を行うとともに、学習習慣を身に付けることができますようにします。
- 4 時間を意識した活動を積み重ねながら生活のリズムを整え、生活習慣の改善を図ります。



通級してくる子どもたちには、自分のペースで学び、学んだことをこれからの学校生活に生かせるように「すこやか教室」では支援しています。問題集などを使って勉強する子どももいれば、アイロンビーズなどの作品を作る子どももいます。タブレットを使って学校の授業をオンライン学習している子どももいます。学校と違って、時間で区切ったり、制服を強制したりはしません。

「すこやか教室」が自分と向き合う大事な居場所と考えています。家から一歩でも出て、少しの時間でも「すこやか教室」で過ごし、元気がでてくることを願っています。

(つづく)

令和6年度授業改善グランドデザイン

全国学力・学習状況調査の結果分析から、8月5日に「令和6年度授業改善グランドデザイン」が策定され、その中で課題克服に向けた授業改善3つのポイント（「1 学び出す」「2 学び合う」「3 学びとる」）が示されていました。その実現のためには、**教師が「話す」授業から教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業**への転換が必要です。まさに今、各学校で取り組んでいる学習指導

要領で目指している「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業の充実がより一層大切です。

子どもの学びから授業を振り返り、授業改善に生かしていくことがいかに大切であるかを改めて確認し、日々の授業の充実を図っていきましょう。



コラム 「コトバ主義教育」から抜け出ること その5 《No.16》

前回の続き。オール2からオール5になって、今度は2から5の間でばらつくようになった小学校低学年の女の子、お母さんの「今度はどうしたの」という問いに「あのね、〇〇ちゃんね(本人のこと)、疲れちゃったの…」と答えました。教師の求めることを理解し的確に答えてオール5だった〇〇ちゃんですが、これからは、自分の体と心と折り合いをつけながらやっていくのでしょうか。やりたいことはしっかりやり、そうでないことはそれなりに…。

深く考えさせられる実話です。「過剰適応」という言葉を思う人もいるでしょう。「学校」(あるいは「教室」)という制度に過剰に適応した後、自分なりに回復した事例と見えるかもしれません。所属する「制度」の中で求められることに「適応」することは、生きていく上で必要なことかもしれません。社会制度の中に生きる私たちは、要求に応答し評価されながらしか生きられないのかもしれません。

でも〇〇ちゃんは、評価を求めても適応しようとはしていませんでした。感受性豊かで、相手の表情や気持ちに敏感に共感する彼女は、それに答えることがうれしかったことでしょう。決して評価を求めてはいないのですが、一方でそれが教師に向けての場合、高い評価を得ることであることも理解しています。お母さんに冗談めかして「そうするとオール5」と明言する彼女(前回参照)は、学校という「制度」をはっきり認識しています。小学校低学年にして。

学校「制度」の中で「要求」し「評価」する私たち教師ですが、既存の学校制度に「適応」させることが、子どもたちに主体的な学びや生き方、well-beingを保障することになるのでしょうか。

小学生の不登校、低学年のいじめ激増、そして中学校のブラック校則等々が問題となっています。学校という「制度」に上手に子どもたちを適応させていくことが私たちの仕事なののでしょうか。それは、子どもたちに「主体的」な学びを保障することとどう関係するのでしょうか。須賀川市は、すべての子どもたちに学びを保障することを理念としています。適応する子どもだけを受け入れたり、そういう子だけにチャンスを与えるという考え方の学校は市内にはありませんが、学校における主体的な学びの創造は難しい問題です。授業は教師が作ります。子どもたちの主体的な学びは教師なしでは生まれないのですが、一方で教師の主導だけでは生まれません。

人間を対象とする職業の専門性について、シングル・ループかダブル・ループかということが言われます。こちらの専門性を一方向的に対象に適用するシングルに対して、相手の状況やコンテキストを理解しともに生きつつ、自分の観方やかかわり方を変えていく(つまり自分も変わる)ダブル・ループはより高度な専門性であり、また専門性を向上させ続けます。それは「聴く」と深く関係します。いかに学校が、教師自身が変わりうるか、「聴く」ことができるか。そのことが、学校という「制度」と新学習指導要領(もう新でもありませんが)の今後と成否の鍵となることでしょう。